



未来へ

想いをつなぎ、

真っ赤な彼岸花が咲き誇る矢勝川の風景は、決して自然に生まれたものではない。

長年にわたり汗を流してきた地域の人たちと、その想いを受け継ぐ人たちが、少しずつ手を重ねて守り続けてきた景色だ。

長年彼岸花の植栽に携わり、今もなお活動している松本勉さんと、そのバトンを受け継ぐNPO法人ごんのふるさとネットワークの榊原さんに、これまでの歩みと未来への想いを聞いた。

「来てよかった」と思ってもらえる景色を残したい

松本 勉さん

結婚を機に、妻の故郷である岩滑へ移住。新美南吉の生家管理に携わるとともに、長年にわたり矢勝川の彼岸花の植栽や管理に携わる。矢勝川の彼岸花を守る会元会員。



松本さんが活動を始めたきっかけは、サイクリングロード沿いに咲き誇っていたキリシマツツジだった。「もう一度、あの景色を取り戻したい」その思いから、矢勝川沿いへの花の植栽を始めた。しかし植栽をするには県などへの申請が必要で、許可を得るまでには多くの苦労があった。ようやく植栽を始めると、地域の人たちが「うちの庭に球根があるよ」「竹やぶの中にたくさん球根があるから持っていきな」と次々に声を掛けてくれた。

球根が植わっているところの草を刈り、一つひとつ球根を掘り起こし、軽トラックで運び、選別し、また植える。その作業を何度も何度も繰り返してきた。

現在も草刈りや球根の植え替えを続ける松本さん。

しかし、活動を支えてきた人たちの高齢化が進み、管理は年々難しくなっている。それでも、「一人ではできないことだからこそ、みんなで守っていくことが大切」と語る。

今年、3年ぶりに行われた地元の子どもたちによる植栽活動も、松本さんの声かけがきっかけだという。何万株もの球根を地元の方から譲ってもらえる機会があり、地元の子どもたちとの植栽活動を復活させたいという想いから、活動と呼びかけた。その準備をしたのも松本さん。子どもたちが植栽した球根が今年の秋に咲くよう、大きい球根を選別し、一度振り植えて更に大きくしたうえで、また掘り上げて子どもたちに提供した。

「球根を植えた子どもたちが『秋になったら見に行く』と言ってくれた。うれしかった。」

「来てよかった」「きれいだったね」

その一言を聞くために、今日も松本さんは矢勝川へ向かう。



景色だけでなく、活動する人の姿も未来へ

榊原 宏さん

2015年、NPO法人ごんのふるさとネットワークの設立に発起人の一人として携わる。現在、同法人事務局を務める。



18年前から矢勝川の活動に携わっている榊原さんは、彼岸花の景色を守るために活動を続けてきた人たちの姿も、この場所の魅力だと話す。

「昔から矢勝川では、地域の方々々が朝から晩まで活動し、いろいろな人と関わりながら、自然と人の輪ができていました。その姿がいつも笑顔で楽しそうで、その楽しさが周りにも伝わっていく。そこが、この活動のすごいところだと思います。」

一方で、約300万本の彼岸花を維持していくことは決して簡単ではない。球根は年月とともに弱り、植え替えや草刈りなど、地道な作業が欠かせない。

だからこそ榊原さんは、「大変な活動」を「みんなで続けられる活動」にしてつなげていきたいと考えている。

「活動に賛同してくれる人や応援してくれる人は少しずつ増えています。みんなの力で支え合って続けていく。そんな形をつくっていききたいです」

保育園児や小学生が球根を植える姿を見守る地域の人たちの笑顔も、その未来につながる景色の一つだという。

「岩滑のみなさんが30年以上かけて守り、育ててきたこの景色は、今では半田を代表する大切な風景になっています。彼岸花の景色だけでなく、そこに集い、関わる人たちの姿も含めて矢勝川の魅力だと思います。この景色と活動を、もっと多くの人と一緒に未来へつないでいきたいです。」



想いが重なって生まれる景色

矢勝川の彼岸花は、一人の力で咲いているわけではない。

きっかけをつくった人、その想いに共感して活動に参画した人、それにより生まれた景色を見てきれいだと思い球根を自宅に植えた人、その球根を矢勝川に植える子どもたち、

多くの人の想いが少しずつ重なり、今の風景が受け継がれてきた。

今年もまた、新たな世代が球根を植え、秋には真っ赤な花が咲く。

その一輪一輪には、未来へつながる誰かの想いが込められている。